

与論島の洗骨儀礼に関する事例報告

町 泰樹

The Case Report of Bone-Washing Ritual in Yoron Island

Taiki MACHI

Abstract

This is a case report about the bone-washing ritual in Yoron Island which located in the middle of the South-East Islands of Japan. In Yoron Island, people treat the dead by performing the bone-washing ritual in which dead bodies are dug out and ritually washed after 3 years to 7 years of burial. Since the year 2003 when the crematory was established, the bone-washing ritual has decreased rapidly, and is facing the crisis of extinction. Thus, this paper could be the last report of the bone-washing ritual of the island. The case of this paper was observed in April 2009. I could collect two cases, and I described them in two chapters respectively. Moreover, I included the description of the ritual words of the prayer for the dead, which didn't appear in most of the previous studies.

キーワード：1. 洗骨 2. 伝統の衰退 3. 複葬制 4. 与論島

Key Words：1. bone-washing ritual 2. declining tradition 3. multiplex funeral system
4. Yoron Island

日本語要旨

本稿では、鹿児島県与論島における洗骨に関する事例報告を行う。火葬場が完成した2003年以降、与論島では急速に火葬が普及し、その反面洗骨は急激に減少していった。そのため本稿は、与論島の洗骨に関する最後の報告になる可能性がある。このような事情から、事例の記述を残しておく必要性を強く感じている。本稿の事例は、2009年4月に観察したものである。2件の洗骨を観察したため、それぞれ2章と3章に分けて記述した。また本稿では、従来ほとんど記録されていなかった儀礼中の拝礼の言葉についても記述している。

1. はじめに

本稿では、与論島の洗骨儀礼に関する報告を行う。これまで筆者は、洗骨を伴う土葬から火葬へという与論島の葬制の変化について調査・研究を行ってきた。その際、洗骨に関しても自ら観察しえた事例が2件あったため、その内容の概略、あるいは一部を用いて論文を発表してきた[町2012]。しかしながら、当該論文では、紙幅の制限もあることから、洗骨の全体像その

ものについて記述することは難しかった。後述するように、与論島では火葬場の設置以降、急激に洗骨の件数が減少している。そのため、洗骨儀礼自体が将来的には消滅するだろうと筆者は考えている。このような事情から、地域の歴史あるいは文化史の変化を考える際の資料として、この場を借りて記述を残しておきたい。

なお、与論島の洗骨に関しては、郷土史家の増尾国恵の著作を皮切りに、次の著作や論文、報告がある [例えば、赤田1993、加藤1999、近藤2005、斉藤2007、津波2008]。また、南西諸島全域の死者儀礼を扱い、そこから文化構造を抽出した研究に、酒井卯作の労作 [1987] がある。それらを参考にしつつ、本稿の事例を参照されたい。

本稿の調査地である与論島は、鹿児島県の最南端に位置する離島であり、県本土よりも沖縄の方が近い。そのため、文化的にも沖縄(琉球)からの影響を強く受けており、洗骨もその一例といえる。元来与論島では、「ジシ」と呼ばれる洞穴墓において、洗骨を伴う風葬が行われていた。風葬自体は、1902年に県警の取締りを受けて禁止され、土葬へと移行するが、洗骨はその際に引き継がれたと推察される¹。その後、2003年に島で初の火葬場である「昇龍苑」が完成すると、火葬率はその翌年から90%を超えた。一般に洗骨は、死者を埋葬後3年～7年の間に行われるとされるが、火葬の急激な普及から9年を迎えた2012年現在、洗骨は減少し、おそらく年に数件ほどしか行われていない。

さて、次章以降では、筆者が観察した2件の洗骨事例を記述していく。調査は、いずれも2009年4月21日から同年4月24日にかけて行った。与論島においては洗骨をする日にちが決まっており、それは旧暦の3月の27日(ナヌカミシヤ)と29日(クーヌカミシヤ)、10月の27日と29日だとされる [与論町誌編集委員会1988: 1076]。10月の分は、町誌が発行された1988年の段階で、8月(旧暦)に行われるのが主流になっていたという。筆者が観察を始めた4月21日は旧暦の3月26日であり、前夜祭から始まる各家の日程は旧暦に対応している。

筆者は与論島の出身であるが、これらの事例で取り上げる家は、筆者の親戚や両親の友人から紹介された。なお、これらの家は、個人情報への配慮から実名は記さずに「家」、「家」とした。また、アルファベットの順番()と儀礼が行われた順番()が一致していないが、これは以前論文化した際に用いた表記をそのまま踏襲しているためである [町2012: 29-30]。本稿では実際の時間軸上に沿って報告を行うため、家 家という順番になるが、その点をご了承いただきたい。

調査の際には、ビデオカメラを島の知人から借り、それを用いて洗骨の様子を撮影した。本稿では、その時に撮影した映像を文字起こしした資料を用いる。ただし、ビデオカメラを借りたのが 家の前夜祭の後であった。そのため、そしてまた後の 家の事例でも前夜祭について詳述するため、 家の前夜祭については概略のみの記述とする。

また、儀礼のなかでは方言による故人への語りかけも見られるが、長く続く場合には標準語に直訳し、その上に方言のルビを振るようになっている。また、訳しづらい方言については注をうち、解説を加えた。

1 風葬から土葬への概略については、町健次郎 [2008: 87-91] を参照。

2. β家の事例

2-1. 前夜祭

家の前夜祭は、4月21日の19時から始められた。18時半を少し過ぎたぐらいに筆者は到着したが、すでに20人以上の親戚が集まり、話をしたりしていた。縁側の手前に机が置かれ、故人のための祭壇として用いられていた。祭壇への供え物は決められているが、これは後の家の事例で詳述する。来客は祭主である家主（男性：60代後半）に挨拶をし、持参した供え物を祭壇前に供え、神式の2礼2拍手の拝礼を行う。供え物には、お金や焼酎やジュース、お米、洗骨に用いられる白い布やタオルがあった。拝礼を終えた来客は、家の者に勧められたり、他の親戚に呼ばれたりして、それぞれの席に着く。

19時になると、前夜祭が始められた。祭主の男性が集まった親戚にこれから前夜祭を始める旨を告げ、その後、祭壇に向かって全員で拝礼を行う。線香をあげ、小杯にお酒を注いで供え、2礼2拍手をする。「明日はあなたをきれいにさせていただきますので、よろしくお願ひします」という旨の言葉を方言で述べ、再度2礼2拍手を行う。拝礼がすむと、故人に供えられた料理を包んでいたラップがはがされる。

その後、祭主が親戚に向けて挨拶を行った。翌日の洗骨の対象となるのが、祭主の母であること、母が亡くなった時には火葬場ができていたが、遺言で洗骨にしたこと、その日の午前中に墓前で洗骨すると報告したこと、集まってくれた親戚への感謝などが手短かに述べられた。その後、祭主から指名された親戚の一人（男性：50代後半）が、献杯²の挨拶をした（これは即興で指名された様子であった）。指名された男性は、こうして親戚が集まったことをうれしく思っていること、火葬場の出来た後も遺言に従って洗骨を行うことがこの上なく親孝行であること、明日の洗骨が滞りなく終わることを願っていることを述べた。

挨拶後、「献杯」という言葉とともに宴会が始められた。来客の前に据えられた御膳には、吸い物や折詰の弁当、バック詰めされた刺身、ミカン、缶のお茶などが置かれていた。15分ほど歓談しながら食事を取っていると、祭主から親戚の男性たちへ焼酎が回された³。一通り回すと、次は祭主の息子が回し、その後は親戚が順番に回していった。

20時を回ると、親戚の女性たちが残った弁当をビニールの風呂敷に包んだりし始める。これが宴もたけなわの合図となる。女性たちの動きがひと段落した頃に、再び祭主を中心に故人への拝礼を行う。祭主は祭壇に向かい、明日の洗骨が滞りなく行えるようにするので待っていて下さいと、方言で語りかける。拝礼が済むと、祭主から親戚へと挨拶が行われ、明日の洗骨の時間などが告げられる。その後、親戚たちはそれぞれ帰路に付き、21時前には、ほとんどの人が家を出て行っていた。筆者も、その流れに従い家路についた。

2 前夜祭には、故人との共食という意味もあり、ここでは故人にお酒を捧げるということで、「献杯」という言葉が用いられていた。

3 これを「与論献奉^{ケンボウ}」という。与論島の宴会では必ず行われる。親となる人物がまず自分のためにお酒を注ぎ、挨拶などをしてからそれを飲み、その他の人々（子）に回していく。子も、お酒を飲む際には挨拶を行う。一巡すると、今度は別の子が親となり、同じように繰り返していく。

2-2. 洗 骨

筆者は、午前5時半に八キビナ墓地に到着した。到着すると、前夜祭に参加していた老人(男性70代後半か)がやってきた。「洗骨について調べてるの?」と尋ねられ、そうだと答えたところ、問わず語りで「昔はもっと早くしていたんだよ。それこそ夜中の3時ぐらいから初めて、日が昇る前にはすっかり終わらせてた家もあった」と話していた。「家の親戚の方ですか」と尋ねたところ、親戚ではないが、家が近所で、今回洗骨を受ける個人とは親しかったため、声を掛けてもらったのだという。

そうこうしているうちに、主催元の家族や親戚が集まってきた。集まった参加者は、それぞれスコップ、バケツや杓子、お膳や杯や焼酎を手にしていて、その後続々と参加者が集まるが、その間に祭主は墓前に線香をあげていた。祭主は、線香を供えると、2礼2拍手で拝礼を行う。前日に墓参りをしたというが、墓前にはキクの花が活けられていた。墓石の隣には、洗骨をうける故人が埋葬されており、その目印として「ガンブタ」と呼ばれる木製の「霊屋」が建てられている。ガンブタの前に、女性が2合瓶の焼酎2本を載せた膳を置く。そのふたを杯代わりにして膳の上に準備をしている間に、祭主が線香を供える。祭主が線香を供える後ろでは、参加者たちが正座し、一同で拝礼を行う準備をしている。

線香を供えと、祭主を中心とした全員による拝礼が行われる。手を合わせながら、祭主は「トートウガナシ」⁴と言い、2礼2拍手をする。その後、手を合わせたまま故人への言葉かけを行う。「トートウガナシ。今日は平成21年の4月の22日(「旧暦の3月の27日だよ」という女性の声が入る)。(そのあとはビデオの音声が悪く聞き取れないが、方言による言葉かけが続く)言葉かけが終わると、再び2礼2拍手を行う。

その後、祭主がお膳の上のお酒を杯に次ぎ、ガンブタの前の杯に移しかえていく。さらに、ガンブタの4隅に塩を振り、清めていく。その後、祭主が同じように杯に焼酎を注ぎ、参加者に向かって「トートウ。私から飲んでまた回して行こう」と述べる。お膳は別の男性に引き継がれ、その男性が参加者にお酒を回していく。

お酒が回される間、祭主はガンブタの4隅をスコップで一掘りしていく。これを「クワイレ(鍬入れ)」という。そして最後に、スコップでガンブタを打ち付ける。これは、洗骨の開始を故人へと告げる合図だとされる。

「クワイレ」が済むと、参加者の男性陣も作業に加わる。男性陣が墓を掘り返している後ろでは、女性たちが日よけ用の簡易テントを組み立てている。男性たちは、ガンブタを固定していた針金を外し、ガンブタを引き抜く。ガンブタの中には、位牌や水や焼酎をささげる杯が納められていた。その後、男性3人がスコップで砂⁵を掘り返していく。ガンブタの跡を目印にして、棺の真横部分から掘り返していく。砂地とはいえ、結構な重労働である。男性たちが交代で行く。棺の形がある程度見えてきたら、蓋の上の砂を手作業でのけていく。これは、棺を

4 与論島の方言で、日常的には「ありがとう」という意味で用いられる。しかし、拝礼の際に用いられる文脈では、「ありがとう」という言葉は浮いてしまう。「トートウ」には「尊い」という字が当てられるが、拝礼などの文脈では、先祖の存在があればこそ子孫である現在の自分たちが存在する、故にあなたの存在を「尊く」感じています、という意味が込められていると解した方が適切である。

5 与論島の墓地は、そのほとんどが海岸に面した場所にあり、砂が敷き詰められている。一般に与論島の土は粘土質の赤土であるため、これは洗骨を行うことを想定して、海岸の砂が敷き詰められたものと思われる。

開けた時に、遺骨が砂に隠れてしまわないための工夫である。砂をある程度のけたところで、棺を取り出す作業が行われる。ガンブタを固定するために棺に巻かれていた針金を、男性4人で引き、棺ごと遺骨を取り上げようとする。しかし、思いのほか棺が重く、また脆くなっているため、作業していた男性の一人が、「(棺が)崩れてるから、棺を開けて(骨を)取っていこう」と言い、その方向で作業が再開された。

棺が開けられ、その中が見えるようになると、祭主は「あらまあ、(洗骨されるのを)待つて^{アイヨ}るわ^{マチカン}」という言葉をつぶやいていた。

棺が開けられると、故人の娘の一人によって頭蓋骨⁶が取り出された。女性の横にはもう一人の女性が傘を持って立っており、頭蓋骨が日光に当たらないようにしている。取り出す前には、「今日はあなたをきれいにしようとして。良かったね、お母さん。」と声を掛け、頭蓋骨を探す間にも、「^{シューヤウレンチャーチュラクナサンチチユカテヤーアンマー}待つていらっしやったのかねえ。きれいになってるよ。」と声を掛けていた。頭蓋骨と一緒に、故人が生前つけていた入れ歯も取り出された。周囲の男性から、「仏骨も忘れるなよ」という声が出される。が、なかなか見つからないため、「後でまたとれるだろう」というやり取りがなされ、女性が頭蓋骨を取り出したところで他の男性たちも参加して、残りの遺骨を探し始めた。結局仏骨は頭蓋骨に隠れており、すぐに発見された。親戚たちは、取り出された頭蓋骨を眺めながら、「きれいに残ってるね」「ずっと待つてたんだね」という言葉をかけていた。

その他の遺骨は、3人の男性と一人の女性によって取り出され、折詰を包むビニール製の風呂敷や牛の飼料が入っていた袋を広げたものの上に載せられていった。それを故人の娘たちなどの女性が中心となり、洗っていく。水⁷の汲まれたバケツや発泡スチロールの箱が用意され、そこで砂などが洗い落とされる。洗った遺骨は、流れ作業で別の人がキッチンペーパーなどで拭き、並べられていく。区画化された墓地という作業スペースの都合から、全ての人がこの作業に関わるわけではないが、残りの人々は作業を見たり、互いに話をしたりしつつ、作業の進み具合に合わせて手伝ったり休んだりしていた。

男性たちのうちの2、3人は、ガンブタや位牌、棺などの使い終えた葬具を海岸へと運んでいた。それらは全て、海岸で燃やしていた。

遺骨がすべて取り上げられると、棺は解体され、男性2、3人が再び砂をもとに戻す。遺骨を洗う作業は続いているが、学校に行く途中で立ち寄った故人のひ孫などもやってきて、「これがばあちゃんだよ」などと説明を受けていた。子供たちにとっては、おそらく初めて見る人骨だろうが、嫌がったり怖がったりする様子もなく、おばさんたちの話を聞きながら、遺骨をまじまじと見つめていた。

一通り遺骨を洗い終わると、遺骨にはお酒が振り掛けられ、清められる。そして納骨となる。遺骨は、足の骨から順番に納骨される。洗骨を担当していた女性が、「足の骨はこれ」などと言って骨を選び分け、順番に納骨していく。最後に、頭蓋骨が納骨される(上あごと下あごが合わせられ、入れ歯も一緒に納骨していた)。その上には白い紙をかぶせ、「カミギヌ」(神衣)と呼ばれる白い死装束を畳んだものが置かれる。

⁶ 洗骨の際に取り出した頭蓋骨は、「ハシャー」と呼ばれ、生者の頭を指す「チブル」とは区別される。

⁷ 水は墓地に共用の水道が引かれており、それを利用していた。

納骨の最中には、男性数名が骨壺を埋めるための穴を掘り、納骨が済むと、骨壺はそこに埋められる。骨壺はすべて埋めるのではなく、蓋の部分が見えるように埋める。そのため、骨壺を実際に穴にはめてみながら、穴の深さを調節する。骨壺の周囲には砂浜で集められたサンゴの欠片や小石が敷き詰められる。

その後、洗骨に使われたテントなどを撤収し、骨壺の前で祭主を中心に拝礼を行う。2合瓶の焼酎2本と塩、生米がおかれた御膳を骨壺の前に置き、祭主が酒を注ぎ、2礼2拍手で拝礼を行う。祭主は、「トートウガナシ。あなたが亡くなってからこれだけの日にちが過ぎました。けれども、今日はあなたをきれいにするためにこれだけの親戚が集まりました。今後とも、親戚一同を見守ってください」という旨の言葉を方言で述べる。その後、再び2礼2拍手を行い、杯に注いだお酒を骨壺へとかける。そして、お米と塩を骨壺の周りに振り掛ける。次に、祭主がお酒を飲み、集まった参加者へとお酒を回していく。まず始めに遺体の掘り起しなどで指示をだしていた男性にお酒を回し、その後息子に回すと、今度は息子が集まった親族にお酒を回していた。それが一段落すると、片づけを済ませ、用事のあるものは家に帰り、それ以外の親戚は祭主の家に戻った。時刻は8時半を回っていた。

2-3. 洗骨後の報告会

祭主の家に着くと、門口に塩と水が置かれており、塩で身を清めてから屋敷内へと入る。家のなかでは、女性たちが忙しそうに立ち回り、集まった人々に振る舞う食事の準備をしている。集まっている親戚は20人を超えないくらいの人数であった。一通り洗骨の参加者が揃ったところで、祭主を中心として、全員で神棚への拝礼を行った。祭主は2礼2拍手の拝礼をし、今日の洗骨が無事に終わったこと、洗骨された故人を先祖の神様たちの仲間として受け入れて欲しいことなどを方言で述べ、再度2礼2拍手の拝礼を行った。

拝礼が済むと、祭主が親戚の男性を指名して献杯の挨拶をさせた。男性は、洗骨が無事に終わって安心した事、故人も喜んでいるだろうという事、それも集まったてくれた皆のお蔭であると言うことを述べ、献杯の音頭を取った。参加者たちは、祭主家から振る舞われた食事を取り、それぞれ話をしたりしていた。しばらくすると、祭主から感謝の気持ちを込めてお酒が回された。祭主の息子や親戚もお酒を回し、加勢してくれたことへの感謝の挨拶をしていた。

10時近くになったところで、祭主が参加者に声をかけ、再び全員で拝礼を行った。その後、祭主から参加者に対する感謝の言葉が述べられ、洗骨を報告する宴会は、ひとまず終了となった。その後、数名の親戚は残ったが、多くの者はそれぞれ家路についた。

3. α家の事例

3-1. 前夜祭

家の前夜祭は、4月23日の7時半から行われた。10分ほど前に到着すると、すでに30人以上の親戚が揃っていた。家と同様に縁側に机が置かれ、祭壇として用いられていた。机の上のお膳には、祭壇の左手奥手部分に線香台と2対の供花、中央上部に人参や大根などの野菜類、右上部にバナナやミカンやリンゴと言った果物類、そして手前にご飯とみそ汁、焼き魚や煮

物といった料理が、2膳供えられていた。祭壇の前には、集まった人々からの供え物として、焼酎やビールがおかれていた。

7時半になると、祭主の男性が拝礼を行った。線香をあげ、小杯にお酒を注いで供え、2礼2拍手をする。「明日はあなたをきれいにさせていただきますので、よろしく願います」という旨の言葉を方言で述べ、再度2礼2拍手を行う。拝礼がすむと、故人に供えられた料理を包んでいたラップがはがされる。

その後、来客に料理が1膳ずつ出されているところで、祭主の男性の挨拶が始まった。「実は、私の母親が亡くなってから、7年。その時、火葬場ができてから（私の母が亡くなった）2人目だったのですが、私は焼かなかった。もう一度はガンブタから母親を拝んで、抱いた方がいいちゅう心があって、焼かなかった。そういうことで、ホントそうしたお蔭様であなたたちを今日こんな風に頑張らせて（来てもらっている）わけなんです、これはもうどうにも出来ない、（どの家でも人が亡くなれば）あることなので、どうにも出来ない事なんです、（それでも集まってくれて）有難うございます。今から私が、もろもろの大神様に言葉を述べてから、（亡くなった）あの人の所にも言葉を述べてから拝みますので、きれいにする仕事ちゅうのが、墓（を）拝まなければいけないので、塩や水であなたたちにもお祓いするつもりであるので、どうか一緒に拝んで下さい。」

挨拶のあと、祭主を中心に全員で故人への拝礼が行われた。2礼2拍手をし、祭主が口上を述べる。「トートウガナシ。今から清めること（を）して差し上げて、もろもろの大神様に対して言葉を差し上げてから、また、明日改葬できるようにもろもろの大神様に対してから言葉を差し上げますので。トートウガナシ」。一礼して祝詞を奏上する⁸。「高天原にかむずまりまするかもろび、伊弉諾の大神、つくしひむかぬ。たちばなのうどの仰ぎばらに襖ぎ袂い給いしと、時になりませぬはらいどの大神達。平成21年旧暦3月29日（故人名：祭主の母）ノミコト・（故人名：祭主の父方叔母）ノミコトの改葬に当たり、もろもろの禍事・罪・穢れ、払い給え清め給えと聞し召し、畏み畏みまおすー。トートウガナシ。明日はまた、罪穢れ無いようにして謹んでチュラウガン⁹させて下さいませ。トートウガナシ。」再度一礼して個人へと言葉かけを行う。「トートウヤガナシ¹⁰。明日はまた、あなた方二人を改葬する日になって、これだけの方々（が）いらっしやって下さってます。改葬にあたり、今日という日を待ち望まれていたと分かっておりますので、また、衣を準備してタオルを準備して、あなた方二人をお喜びさせて差し上げて、きれいな魂にして差し上げますので。明日はあなた方（に会えるのを）待ち望んで、今日の夜祭といってこれだけの人々が集まって下さって、本当にありがたことです。人生というのは泣きもあり笑いもあるけれど、全くご先祖様のお蔭です。あなたを支えて下さった全ての人々がいらっしやってますので、また、いらっしやってる方々を、明日には、もろもろの罪穢れ（が）無いように見守っていただきまして、待ち望まれていて下さい。謹んでトートウガナシ」。これらの口上を述べた後、再度2礼2拍手を行う。

8 祭主の男性は、この祝詞を、島内の神職に教えてもらったという。

9 洗骨のこと。「チュラ」が「きれい」とか「美しい」を意味する。「ウガン」は「拝み」である。現地では一般に洗骨という言葉は用いず、「カイツウ」（改葬）、「ミーウガン」（新しくして拝む）などという言葉が用いられる。

10 「ウヤ」とは「親」のことで「ガナシ」は敬称である。

拝礼が済むと、祭主はガジユマルの葉に塩水を付け、自らを払い、次に祭壇を払う所作を行った。その後、来客一同に向かって祓いの所作を行った。

その後、祭主が再度来客に向かって挨拶を行う。「亡くなった2人については話し出すときりがないけども、それを支えてくださったみなさまには本当にありがたいと思っています。数えきれない恩をいただいたと思いますが、これからもまたみんなで付き合いを続けていきたいと思っていますので、よろしくをお願いします。

この挨拶が済むと、「楽しんでください」と祭主が言い、飲食が始められた。しばらく食事をした後、祭主の息子が挨拶をし、与論献奉¹¹を回した。その後も飲食と歓談が続けられていたが、しばらくすると祭主を中心に故人への拝礼が行われた。これは前夜祭の終わりを告げる拝礼でもある。

2礼2拍手をし、言葉かけを行う。「トートウガナシ。^{アツチャーヤ シラリユールウヤガナシ}明日は改葬されるご先祖様、^{アツチャーヤ マチカンディーシチ チュラーサタマナテイ}（いずれも故人名）、トートウガナシ。明日はまた、待ち望まれて、きれいな魂になって^{ウーチュティ アツチャーヤ ウレータトゥールンチャーアレーティ シ チュラーサシューフトウ イシヨウシヤブーラ}いただいて。明日は、あなた方二人を洗って掃除してきれいにするので、喜んで天にも昇る様^{シヤシチウウーリ}な気持ちでいらっやって下さい。トートウガナシ。^{アツチャー}明日を楽しみにして、また明日はあなた^{アツチャー ウレータ}方二人の7年忌をしようと思っていますので、明日はチュラウガンされて下さい。トートウガナシ」。最後に、再度2礼2拍手をする。

この拝礼が済むと、周囲の年配者からは、「いい親孝行だ」、「^{ハツシユル}こんなに（良い）^{ウヤ}親孝行^{チチアユンミューティヨウ}というのがあるものか」という声が上がっていた。

拝礼のあと、祭主から来客に挨拶がなされた。「私としては何の心配もないのですが、明日は7年忌もそのまま行うので、うちの家族や子供たちはもし骨になってなかったらどうしようという心配をしてるみたいで¹²、ただ、私は牛の草だけを刈っていればいい身分なので、もう何の心配もしていません」。息子から「草はもう刈っておいたぞ」という声がかかり、一同が笑う。「私の人生がこんなもんだということを知って、また明日もよろしくをお願いします。」といい、明日手伝いに来てくれる人は朝6時に墓に集まるようにアナウンスが入った。その後、参加者たちは三々五々散会していった。

3-2. 洗 骨

当日は、朝6時に八キピナ墓地へと集合した。祭主家の人々は、トラックにテントや椅子、発泡スチロールの箱やスコップを載せてやってきていた。初めは4、5名しかいなかったが、最初の拝礼を行う頃には、総勢15名（内女性3名）の人々が集まっていた。墓前には、洗骨するスペースを確保するためにブルーシートが敷かれた。

墓石の左右に、ガンブタが建てられており、洗骨を受ける故人が眠っている目印となっている。墓石の前には、青菜と塩、生米、1対のお酒の入った徳利が供えられる。祭主が2つの小杯に酒を注いで拝礼を始めると、周囲にいた人々も一緒に拝礼を行った。2礼2拍手をし、故

11 本稿注3参照。

12 一般的に、洗骨を終えてから7年忌をしなければならぬとされる。また、故人がこの世に強い思いを残していると、腐りきっておらず、「ミイラ」のように肉が残ったりすると言われ、これは故人のみならず、祭主らにとっても不名誉なこととされている。

人への言葉かけを行い、再度2礼2拍手を行った¹³。拝礼後、小杯のお酒を墓前の杯に移し、墓の左右に塩と米を振る。祭主はさらに、ガンブタや墓所の4隅にも塩をふり、場を清める。その後自らにも塩を振り、参加者にも塩をつまませ、それぞれの身を清めさせた。その間に祭主は、2つのガンブタにそれぞれ2礼2拍手で拝礼をしていく。

その後、男性たちがガンブタの取り外しにかかる。ガンブタの周りにおかれた下駄や杖が取り除かれ、ガンブタを固定していた針金が外された。家と異なり、「鍬入れ」をすることなく、ガンブタの置かれていた場所の砂が掘り返されていった。遺体の掘り起しには、遺体それぞれに2人ないしは3人の男性が当たっていた。その後ろでは、取り外したガンブタが解体される。また、女性たちは、ガンブタの解体によって出た木くずや、遺骨を吹いた後のキッチンペーパーを捨てるゴミ袋¹⁴を広げるなどしている。

棺がでてくると、蓋が取り除かれ、遺骨が姿を現す。掘り起こす作業をしていた男性が故人の頭骨を取り、後ろに控えていた年配の女性に手渡す。女性は、遺骨についた髪や砂を大まかにキッチンペーパーで拭き落していく。

遺骨を取り上げる作業はさらに続けられ、まずは遺体と共に納棺していた副葬品や故人が着ていた死装束が取り除かれていった。これらのゴミは、総じて「ヨゴレモノ（汚れ物）」と称されていた。ヨゴレモノは、飼料袋へと詰められており、それをごみ焼却場に持ち込んで焼いてもらうのだという。この時、なるべく棺の中に砂が入らないようにする。これは、砂が入ることで遺骨が見つかりにくくなるのを防ぐためである。また、遺体に履かせていた足袋などには、足の骨がそのまま詰まっているため、ヨゴレモノと一緒に遺骨も捨ててしまわないように注意する。作業にあっている人に対して、祭主から「手足の骨はいらないってわけにはいかないぞ」ということが冗談交じりに言われていた。

取り上げられた遺骨は、まずキッチンペーパーなどで砂などを大まかに拭き落とし、その後水の張ったタライで洗い清めていく。この作業は、男性で関わっている人もおり、性別による分業は見られない。洗い終わった骨は、飼料袋の上などに、置かれていく。

遺骨を全て取り出し終わると、棺が墓穴から取り除かれる。棺は解体され、ガンブタの木片などと一緒に飼料袋へと入れられる。それらのゴミは、燃えるゴミとしてトラックに積み込まれていく。その様子を観察していた筆者に、骨を洗っていたおばあさんが「昔はこういうゴミは全部砂浜に持って行って燃やしてたんだけどね、今は清掃センターがあるから（そっちに持っていくんだよ）」という風に話してくれた。すると、横で同じく骨を洗っていた中年の男性が、「(清掃センターの方では) 持って来いとかは言ってないけどね。前洗骨した時にゴミを清掃センターに持って行ったら、そこにいた知り合いがめんど臭そうにしてたんだよ」と返す。おばあさんは、「ああ、どこそこの誰々さん（実際の人名が出される）ね。そりゃ確かに普通のゴミとは違うし、持ってこられても困るわね」と言う。さらに男性が、「だけど清掃センターでは持って行っても断ったりはできんもんなあ」と続けながら、共通の知り合いの話題に花を咲かせていた。

遺骨を洗う作業が終盤に差し掛かると、祭主が頭蓋骨と下あご、仏骨を探し、それらを組み

13 この時の言葉掛けの内容は、ビデオテープからは聞き取ることができなかった。

14 牛の飼料の袋が用いられていた。

合わせていた。周囲にいた男性からは、「きれいになっていたね」という声が祭主にかけられ、祭主も、「うちの母親がちゃんときれいになっているか心配していたけど、こうしてみるときれいになって洗骨されるのを待ち望んでくれていたんだなあ」としみじみと話していた。頭蓋骨と下あご、仏骨を一組しておくのは、納骨の作業に備えた準備であるが、祭主が「これさえ間違えなければ大丈夫」と言っているところを見ると、他の遺骨に比べて、頭部の遺骨が重視されていることがわかる。

その頃、遺骨の掘り出し組では、掘り出した穴を元に戻し、骨壺を埋めるための穴を新たに掘り出していた。骨壺にスコップを当て、大体どれくらい掘れば骨壺の上部が地面から出るのが検討を付けて、その分の穴を掘っていく。その作業と同時進行で、墓所の砂をスコップで均す作業も行われていた。また、この間に海岸から砂を持ってくる。この砂は、洗骨終了後の墓の整備に用いられる。

洗い清められた遺骨は、さらにお酒をかけて清められ、納骨となる。頭蓋骨、下あご、仏骨には、それぞれにお酒がかけられ、残りの遺骨にもまとめてお酒が振り掛けられた。

納骨の際には、まず祭主が納骨壺に塩を振り、清める。その後、納骨のしやすさを考慮して同じ大きさの骨を揃え、足元の骨から順番に納骨されていく。納骨の作業は祭主が中心となっ
て行われていたが、親戚の男性で納骨している人もおり、係などが明確に定められてはいないようであった。頭部以下の遺骨が納められると、最後に頭蓋骨と下あご、仏骨を組み合わせて、それを骨壺に納める。遺骨を全て納め終わると、「キヌ」と呼ばれる新しい白装束やタオルが遺骨の上に敷き詰められる。これは、前夜祭で親戚などから供えられたものである。最後に蓋をして、納骨は終了である。

納骨後、遺骨を拭いたキッチンペーパーなどのゴミや、洗骨に用いたタライなどが片付けられた。それと同時に、2、3人の男性が骨壺を埋める作業を行っていた。骨壺の上部3分の1から4分の1を地上に出して埋め、ふたを針金で固定する。その作業を横目に海岸から持ってきた砂をまき、墓所を整備していく。

骨壺を固定する作業や墓所整備が終わると、墓石の前に1対のお酒と塩と米を置いた御膳が供えられ、全員での拝礼となる。祭主の男性を中心に、全員で2礼2拍手を行う。そして、祭主が墓前で故人への言葉をささげた¹⁵。言葉を述べ終わると、再び2礼2拍手を行う。

拝礼後、祭主の男性は膳の上に備えていた小盃のお酒を墓前の杯に注ぎ、墓石の周りに軽く塩を振った。その作業を、祭主の息子が引き継ぎ、墓所の周囲に塩と生米、酒をまいていく。その間に、祭主の男性は洗骨の参加者にお礼を述べる。また、水を張った茶碗にガジュマルの葉を浸し、その葉を使って参加者に水を振っていた。お礼を述べ終わると、その後は荷物などをトラックに積むなどしてから、祭主の家へと向かった。

祭主家では、家と同じく全員で神棚に拝礼を行い、洗骨を滞り終えた旨の報告が先祖に対

15 ここでの言葉掛けは、断片的にしか聞き取ることが出来なかった。聞き取れた範囲から推測するに、まず故人の名を挙げ、さらに土地の守り神などに対しても感謝の意を述べ、今日洗骨をするために故人の子孫が集まり力を尽くしたこと、この後7年忌も予定しているので楽しみにして待っていて欲しいこと、今後の家が繁栄すべく子孫である私たちも努力するので、見守っていて欲しいということ、等が述べられているようであった。

してなされた。午後には7年忌も予定されていたため、その後は簡単な朝食が振る舞われ、参加者はそれぞれ散会していった。

4. おわりに

本稿では、鹿児島県与論島における洗骨について報告した。報告にあたって、従来の報告では取り上げられていなかった、拝礼の際の言葉掛けについても記述した。現地の人々の言葉を記述しておくことで、儀礼の行われる文化的背景をより理解することが出来るだろう。

本稿では、報告という趣旨から儀礼を解釈することはしなかったが、最後に一点だけ述べておきたい。洗骨中には、墓前にせよ遺骨に向けてにせよ、故人へと話しかける場面が目立つ。また、洗骨が故人との「再会」の意味を持っていたと語る人も多い。これは、遺骨という強力な死者表象を通して、死者とコミュニケーションを図る行為である。その背景には、単に「文化」という言葉には収めきれない、生前の故人との個別的で親密な経験の共有がある。このような経験の共有、死者とのコミュニケーションの在り方については今後検討すべき課題であるが、それは「孤独死」や「直葬」といった言葉が取り沙汰される現代にあって、私たち全てに突き付けられている課題でもある、と私は考えている。

参考文献

- 赤田光男 1993 「与論島の洞穴墓と改葬習俗」『国立歴史民俗博物館研究報告』49：323-347。
- 加藤正春 1999 『奄美与論島の社会組織』，第一書房。
- 近藤功行 2005 『琉球文化圏，与論島における死の認識をめぐる人類学的研究』，平成17年度名古屋大学大学院文学研究科学学位(課程博士)申請論文。
- 斉藤美穂 2007 「与論島の改葬」『奄美ニューズレター』32：58-66。
- 酒井卯作 1987 『琉球列島における死霊祭祀の構造』，第一書房。
- 津波高志 2008 「与論島における洗骨改葬」『奄美諸島における聖地および葬地の人類学的共同研究』(平成17年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書 研究代表者：津波高志)：11-32。
- 町健次郎 2008 「与論島の葬法」『死の儀法 在宅死にみる葬の礼節・死生観』，小松和彦・近藤功行(編)，ミネルヴァ書房：87-98。
- 町泰樹 2012 「鹿児島県与論島における洗骨の規範化とその不成立 「火葬場必要論」と民俗知識の在り方をめぐって」『九州人類学会報』39：19-36。
- 与論町誌編集委員会 1988 『与論町誌』，与論町教育委員会。